

水田での飼料用とうもろこし生産

畜産経営では、飼料の多くを海外に依存していますが、ウクライナ情勢による穀物価格の上昇等により飼料価格が高騰し、経営を圧迫しています。一方では、米の需要は低迷する中で、水田の有効活用が課題となっています。

そこで、農業技術研究センターでは、水田を生産基盤とする飼料用とうもろこし生産の実証に取り組んでいます。



写真1 加須市で栽培実証した飼料用とうもろこし

栽培のメリット

- ・省力的に栽培できます。
- ・ほ場の物理性の改善、麦大豆等の連作障害の防止が期待できます。

栽培の留意点

- ・湿害に弱いので、暗渠、明渠等の排水対策が必要です。
- ・流通の仕組みがありませんので、作付け前に販売先を確保する必要があります。



写真2 汎用型飼料作物収穫機による収穫



茎葉実をまとめて収穫
「青刈りとうもろこし」
⇒ 牛の飼料



写真3 汎用コンバインによる収穫



子実のみを収穫
「子実とうもろこし」
⇒ 全ての家畜の飼料

飼料用とうもろこしは、水稻・大豆に比べ、省力的に栽培することができます。ただし、耐湿性が低いため、排水の悪い水田では排水対策が必要になります。現在、排水対策を含め、栽培技術について検討を進めており、成果がまとまり次第情報提供してまいります。飼料用とうもろこしの栽培を検討される際には、当担当にご相談ください。